

ほどの総延長距離がある」ということがわかったという。常識的に考えれば、コロナという例外状況になって初めて経営者が知るということ自体が異常事態なのである。

F・ブローデルは取引回数が多くなるほど不正が入り込むという。その象徴は児童労働（5歳～17歳）が21世紀になってもなくなならないことに表れている。マルクスが19世紀に糾弾したことがいまだに堂々で行われている。しかも、2016年には1.52億人まで減少していた児童労働が20年には1.60億人へと増加に転じた。児童労働が占める割合が高いのは欧米から最も遠いサハラ砂漠以南であって2012年21.4%を底に20年に23.9%へと増加した。

それでも人間か vs. これが人間だ

ビリオネアは、医療従事者やサプライチェーンの末端で働くひとたちの「犠牲の量」をまったくくみ取れなくなっている。こうしたことは経済格差を一段と拡大させ、社会秩序の崩壊につながり、近代社会の危機となる。シェイクスピアは『ベニスの商人』で支配階級と被支配階級の抜き差しならない対立を描いた。高利貸しでユダヤ教徒のシャイロックが借金を返せなくなった冒険商人でキリスト教徒のアントーニオを「人肉裁判」に訴えた。

シャイロックは血も涙もなく、慈悲心ももたないように描かれているが、対立の根源には支配と被支配の根深い対立がある。すなわちキリスト教徒が非キリスト教徒を支配するというヨーロッパ人の考え方がある。シャイロックはアントーニオから着物に唾を吐きかけられるなど犬や馬のように扱われてきた。そうしたキリスト教徒による非人間的な扱いに抗議し、シャイロックは法の適用を願って債権者として「人肉裁判」を起こしたが、それは『権利のための闘争』（イエーリング）だった。彼は裁判で「唾は自分の頭で受け止める」、すなわち報いはアントーニオが自分で引き受け、肉1ポンドを差し出せと迫る。この宗教対立は、デカルトやベーコンらによって「進歩」という概念によって変貌を遂げた。進歩している文明国は未開の野蛮国を指導する義務があるという考えに至る。この考え方が植民地主義を正当化したが、20世紀になると民族自決主義の原則で時代にそぐわなくなる。そこで、支配と被支配の関係は進歩した文明国は債権国となり、債務国

である未開国を指導・支配するとなった。『ベニスの商人』では債権者シャイロックは敗訴したが、20世紀になるとウォール街が勝者となったのである。

歴史上支配と被支配の関係は常に存在するが、それを縮めようとする努力が進歩である。逆にこの関係が修復できなくなると「歴史の危機」となる。シェイクスピアの時代はまさに「長い16世紀」であり、ブルクハルトのいう「歴史の危機」そのものだった。戦後IMFを通じて米国が世界支配をしてきたし、21世紀になるとECBを通じてドイツが事実上ヨーロッパの盟主となった。さらに、支配と被支配の対立は米国内にも及んでいる。キリスト教対ユダヤ教から今度は米白人対非白人、さらには高学歴の白人とそうでない白人という間で対立が激化している。

2007年、米バージニア工科大学で韓国からの移住者であるチョ・スンヒが「顔に唾を吐きかけられる気持ちがわかるか」と叫び、32人を殺害し自決した。残されたメモには「お前たちはすべてをもっていた。メルセデスでも満足しなかった」とあった。シャイロックと同じである。シャイロックは改宗を条件に命は助けられたが、精神的には死んだ。こうしたことが中世や近代の終わりに起きるのは、支配者に寛容の精神が欠落し、被支配者を排除するからだ。

シャイロックは裁判で単にアントーニオが憎いから慈悲はかけぬと証言すると、アントーニオの仲間であるパサーニオはシャイロックにむかって「それでも人間か？」と叫ぶ。このキリスト教徒の発言に対立の根源が潜んでいる。劇団SCOTを主催し演出家で思想家の鈴木忠志は、連合赤軍事件でマスコミは「これでも人間か！と書くけれども、これが人間だ！」と書くべきだという。

これでも人間かといって排除するのであれば、「人間を人間たらしめる基準が確固として存在し、その基準のうちには殺人という行為は含まれていない、と考えていることになる」と鈴木忠志はいう。「古今東西、殺人こそが人間がもつもっとも不可解な行為であり、その不可解性が人間を人間たらしめてきた」というのが彼の基本的認識だ。このように考えないと、排除された人たちへの「共感」が生まれえない。とりわけ例外状態では人間は経済的合理性だけで動かない。まず必要なのはビリオネアのモラル改革だ。